国語問題用紙

組・番号	氏名
3年　組　番	

X304-1

一

葉山さんたちは、国語の授業で【Ⅰ】の文章を読み、【Ⅱ】のようにグループで話し合いました。後の㈠～㈤の問いに答えなさい。（【Ⅰ】はページごとに上段から下段に続いている。）

【Ⅰ】授業で読んだ文章

小学一年生のセン（私）には、体の弱い二つ下の妹（チエミ）がいて、夏休み中も海や山での遊びを我慢していた。そんな中、毎年お盆に来る親戚のイチノセキ一家が、今年も泊まりに来た。センは六年生の洸兄と海に行き、チエミは高校生のマリさんにかわいがってもらい、楽しく過ごした。その日の夜、センは洸兄の隣に座って夕飯を食べている。

隣には、口の中にもくもくとご飯を入れる洸兄。

「セン、これ食ったらファミコンやろうな」

「うん！」

たくさんの会話が飛び交う。食器のかちゃかちゃなんて、声の下に隠れてしまってほとんど聞こえない。食卓の周りだけ、何となく暑い気さえする。

私は小さいテーブルの隅にいて、でも確かに大きく包まれていると感じた。この騒がしい食卓の中に、すっぽりと。それはとても心地よかった。

「ね、洸兄、イチノセキの一家とウチと、一緒になればいいと思わない？」

隣に話しかけると、洸兄はご飯茶碗を下ろして、「ん。ほえいい」とやっぱりご飯で頬をふくらませながら箸で私を指した。①それで私はますます気を良くした。

が、そこにマリさんの高い笑い声が割って入った。それは会話に夢中な大人たちの気までは引かなかったけれども。

「やあだあ、センちゃん。そんなことあるわけないじゃない」

見ればマリさんは、ひどいくらいにいつもと同じ、やさしげな顔で笑っていた。その横でチエミが、口元にご飯つぶをくっつけたままぽかんとした。私も、まさか真っ向から否定されるとは思っていなかったので、まばたきしかできなかった。隣で洸兄が、明らかにむっとしたのがわかった。

「大人げねえの……」

洸兄のそのつぶやきを、マリさんは聞き逃さなかった。マリさんはわざと強く箸をお碗の上に置いた。ふたりのあいだの空気が張る。

②頭がすうっと冷えた。この姉弟の確執など知らなかったものだから、見せつけられてショックだった。けれどもそれより、私の気にかかっていたのは、真正面に座ったチエミのことだった。チエミは涙を抑えるというよりは引っ込ますように、目も鼻の穴もいっぱいに開いて、肩を小さく震わせていた。それが痛々しくて、私は本当にさっきの発言を後悔した。

三日だった。高校生になったマリさんが、この何もない田舎で子守に耐えられたのは。

四日目に、マリさんはお先にとこの家を出ていった。電車で帰ると四回も乗換えがいるらしいのに、それでもひとりで帰った。「夏休みの宿題が間に合わない」という口実ではあったけれど、私はお母さんとばあちゃんが皿洗いをしながらぐちゃぐちゃ言うのを聞いてしまった。

「宿題やんねばなんねような、いい学校でもねえねがなあ」

「見だが、あンの足の爪やー。まっピンクよ」

三日間通っていた海に、私と洸兄は行けなくなった。チエミを連れて、田んぼのあぜ道をぶらぶらした。洸兄はトンボをつかまえて私の耳をかませたり、草相撲に使ういい草の選び方を教えてくれたり、相変わらず面倒見のいい洸兄だったけれど、どこか心ここにあらず、なことが多くなった。私とチエミを遊ばせて、自分は庭の塀の上に腰かけてぼうとする時間もあった。

そういう洸兄を見つけてしまうと、私は何とか気を引きたくて、「連続コインを取るマリオ」とか「マリオに踏まれるクリボー」とかファミコンネタのものまねを披露した。洸兄は大いにウケて、手を叩いて喜んでくれたけれど、でもそれは何の歯止めにもならなかった。私だってわかってはいた。マリさんはきっと二度とここに来ない。そして洸兄も、この先もう何度もここに来て遊んでくれはしないのだ。今年を入れて数えても、五本の指が洸兄のために折られることはないだろう。

八日目に私たち——家族全員から、もう仕事の始まった両親を除いた四人——は、イチノセキ一家を道まで出て見送った。ライトバンの後部座席に乗った洸兄は、私とチエミの頭をそれぞれぽんぽんと叩いて、「また来年な」と言って例のごとく健康的に笑った。私たちは何も言わずにうなずいた。

洸兄とおばちゃんが手を振る、車の窓が遠ざかる。砂利道から出て、学校とは逆のほうへ、長い長い一本道を車は行く。次の集落に入るまで、ずっと車は見えていて、私たちは手を振り続ける。洸兄たちも、私たちが消えるまでえんえん手を振っている。

赤い屋根の家の陰に、車がすっと隠れてしまうと、じいちゃんもばあちゃんもフーッと大きくひと息ついた。「終わった終わった」などと腰を伸ばしながら家のほうへ引っ込んでいく。いつもなら私とチエミもすぐそれに続くのだけれど、チエミはうつむいて動かなかった。私もそこでじっとしていた。

「ねえちゃん」

チエミがふいに顔を上げた。ぎらぎらと濡れた瞳が、まっすぐに私を見た。

「マリちゃん、もう来ないよね」

来ないだろうね、とあやうく返しそうになるのを、ぎりぎりのところで呑み込む。

「わかんないよ。来年になってみなくちゃわかんないよ」

私は腰をかがめて、チエミの両手をにぎった。小さな手はとても熱い。チエミがぼろんと大粒の涙をこぼして、思わずつられそうになるのをこらえた。うつむいたら足元で、蝉の死骸に蟻がたかっていた。蝉は、夏の陽に焼かれきってしまったかのように乾いていた。

ざっと音が鳴る。風が吹いて、稲の葉を撫でる音だ。大きい風が、チエミの長い髪をばあっと舞わせて、私の半ズボンから出た脚のあいだを通り抜けていく。

気が付いたら夏休みは、あと四日しかなかった。洸兄が来た日から、一行日記が白いままなのを思い出す。遊び疲れて何も書けなかったのだ。その七行を、小さい文字でつめてつめて十四行くらいにしよう、と思いながら、私は洸兄がしてくれたように、チエミの手をしっかりとにぎり続けていた。

（豊島ミホ「夜の朝顔」による。）

葉山　まず、みなさんは、この文章の登場人物の人物像について、どのように読み取りましたか。

ア　宮本　センは、無邪気で子どもらしい面もありながら、いつでも姉として妹を気にかけ心配する、思いやりのある人物だと思います。

イ　青木　チエミは、周囲の人のことを思って気持ちを押し隠し、先回りして展開を読み、良い雰囲気を作ろうとする我慢強い人物です。

ウ　小島　洸兄は、自分より幼い子どもたちの気持ちに寄り添い、気づかいながら接することのできる、面倒見のよい人物だと思います。

エ　中野　マリは、ふだんはおだやかで優しい性格なのですが、自分の弟に対しては、気持ちを抑えることなく率直にぶつける人物です。

葉山　ありがとうございます。では次に、表現について話し合いたいと思います。文章中で気になった表現はありますか。

宮本　私は、マリの「やあだあ、センちゃん。そんなことあるわけないじゃない」という発言に着目しました。この発言から、その場の雰囲気は一変しますよね。この言葉を朗読するなら、どのように読めば場面の雰囲気がよく伝わるでしょうか。

青木　子どもじみたセンと洸兄のやり取りに対し、ありえないことだと笑い飛ばすような明るい口調で読むのがよいと思います。

葉山　小学生二人に比べ、自分は知識豊富な高校生だという自覚があるので、二人をさとすような優しい口調の方が合っているのではないでしょうか。

中野　僕はどちらもこの場面に合っていると思いますよ。

宮本　私は、特に、文章中の……部の情景描写が印象に残りました。この部分はどのようなことを表現しているのでしょうか。

青木　「蟬の死骸」や「稲の葉を撫でる音」は［　　］の訪れを表していると同時に、センの心に変化が訪れたことも暗示しているのだと思いました。

小島　私は、「蟬の死骸」は悲しみに暮れているセンとチエミの心を象徴しており、「大きい風」は、その二人の悲しみを吹き飛ばして、前に進ませるものとなっているように感じました。

葉山　なるほど。みなさん、情景描写からいろいろなことを読み取ったのですね。

(一) 【Ⅰ】に ①それで私はますます気を良くした とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 会話が飛び交う食卓の雰囲気に幸福を感じていた上に、自分の提案に洸兄が賛成してくれたから。
イ 適当にあしらわれるだろうと思っていた質問に、洸兄がまじめに、また肯定的に答えてくれたから。
ウ 洸兄といるだけでも幸せだというのに、食事を中断してまで洸兄が自分の質問に答えてくれたから。
エ 夕食後にファミコンをして遊ぶ約束をしたことで、洸兄の時間をひとりじめできたように感じたから。

(二) 【Ⅰ】に ②頭がすうっと冷えた とあるが、この時のセンの心情として**適切でないもの**を、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア マリさんと洸兄のいざこざを初めて目の当たりにして、二人の普段とは違う一面にとても驚いている。
イ 姉弟の冷え冷えとした空気に緊張し、自分がよけいなことを言ったことが原因だとわかって落ち込んでいる。
ウ チエミはマリさんが大好きなので、マリさんの発言にショックを受けたのではないかと心配している。
エ イチノセキ一家とは一緒になれないと知って失望する一方で、姉弟の仲の悪さを冷静に受け止めている。

(三) 【Ⅱ】に この文章の登場人物の人物像について、どのように読み取りましたか とあるが、【Ⅱ】の［　　］の中で、登場人物の人物像について、本文の内容に**合わない**発言をしている人物は誰か。次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア 宮本　　イ 青木　　ウ 小島　　エ 中野

(四) 【Ⅱ】の［　　］に入る季節を表す漢字一字を書きなさい。

(五) 【Ⅰ】の表現の特徴として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 倒置法を用いて子どもたちの言動を描くことで、子どもたちの幼さを強調している。
イ 擬声語や擬音語を多用することで、文章全体に生き生きとした臨場感を生み出している。
ウ 簡潔な会話文と擬人法を多用することで、登場人物の心情がわかりやすくなっている。
エ 複数の登場人物の視点から一連の出来事を語ることで、文章に客観性を持たせている。

二

中村さんたちは、国語の授業で、【Ⅰ】の古典の文章を読み、【Ⅱ】のように内容についてグループで話し合いました。後の(一)～(五)の問いに答えなさい。

【Ⅰ】古典の文章

※1大雅道人（たいがだうじん）といひしは、をさなきより書画を好みて、あまねく天下の名高き名所を見回り、富士の山にもあまたたび（何度も）登る。あるとき、十二の富士の図を描きて、時雨（しぐれ）、霧、雲、あるいは雪、月など、それぞれの風情（ふぜい）をあらはしぬ。世（情趣を絵に表した）の人、そのめでたきことをほめののしり、（すばらしさを盛んにほめたたえて）①これを請（こ）へども、再び描かず。この人、欲少なく、多くの宝をもて画を（絵を描いてほしいと頼むけれど、一度は描かない）求むるにも、おのれが心にかなはぬは、筆を執らず。貧しき人のためには、常に書画を書き与へて、②その人の助けとなしぬ。

※2明和（めいわ）の頃、※3唐土（もろこし）より渡り来（きた）れる大鵬和尚（たいほうをしやう）といふ人、大雅を呼びて、唐土の西湖（せいこ）の風景を描かしむ。（描かせた）大雅、筆を執りてそのあらましをかたどるとき、和尚、そばにまもりゐけるが、上の方に峰を一つ描き出（い）だせるを見て驚き、（座ってじっと見ていたところ）

「あな、あやし。あれは※4飛来峰（ひらいほう）とこそ見ゆれ。我、唐土に生まれて、折節は西湖わたりに遊びしだに、かほどに西（ああ、不思議だな）（時折西湖辺りを遊覧したそんな私でさえ）湖の風景を写したる③やうに見事に描くべしとは覚えず。ましてこの国の人の、いかにかくは描きしや。」と深くめでけり。（感動した）（描けそうには思えない）（どうしてこのように描いたのか）

※1　大雅道人＝江戸時代の画家である池大雅（いけのたいが）。　※2　明和＝江戸時代中期の年号。
※3　唐土＝現在の中国。　※4　飛来峰＝西湖近くにある峰。

【Ⅱ】話し合いの一部

中村　最後に「深くめでけり」とありますが、これは誰のどのような気持ちを表していると思いますか。

山下　大雅道人が絵を描く様子をそばで見ていた大鵬和尚は、大雅道人が、絵の上の方に、［　　］を描いたのを見て驚いたのですよね。

田口　大鵬和尚は、［　　］が描かれた西湖の風景の絵を見て、「日本に住む大雅道人が、どうして西湖の風景を写したように見事な絵を描くことができるのだろうか。」と、とても不思議に思ったのではないでしょうか。

高野　つまり、「深くめでけり」は、大雅道人が描いた絵のすばらしさに深く感動した大鵬和尚の気持ちを表しているのですね。

中村　そうですね。大雅道人の絵は、多くの人を感動させるすばらしい絵のようです。

(一)　【Ⅰ】に①これを請へども、再び描かず　とあるが、大雅道人が人々から頼まれても、同じ絵を描かなかったのはなぜか。その理由について説明した次の文の［A］～［C］に入る最も適切な語句を、【Ⅰ】の本文中からそれぞれ漢字一字で抜き出して書きなさい。

大雅道人は［A］が少なく、自分の［B］に合わない場合は、多くの［C］を差し出して絵を描くように頼まれても応じない人だったので、富士山の絵を頼まれた時も、描かなかった。

(二)　【Ⅰ】に②その人の助けとなしぬ　とあるが、誰が誰を助けたのか。最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア　大鵬和尚が大雅道人を助けた。
イ　大雅道人が中国の人を助けた。
ウ　大雅道人が貧しい人を助けた。
エ　世間の人が大雅道人を助けた。

(三)　【Ⅰ】の③やうに　の読み方を現代仮名遣いに直して、平仮名で書きなさい。

(四)　【Ⅱ】の二か所の［　　］に共通して入る最も適切な言葉を、【Ⅰ】の本文中から三字で抜き出して書きなさい。

(五)　【Ⅰ】の文章の内容について述べたものとして**適切でないもの**を、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

ア　大雅道人は、幼少から書画を好み、名高い名所を広く見て回った。
イ　大雅道人は、富士山に何度も登り、十二種類の富士山の絵を描いた。
ウ　大雅道人は、富士山の絵に、時雨、霧、雲、月などの情趣を表現した。
エ　大雅道人は、中国の西湖辺りを遊覧し、すばらしい絵を多く描いた。

三

池田さんは、国語の授業で【Ⅰ】の文章を読み、内容を整理して【Ⅱ】のようにノートにまとめました。後の(一)～(五)の問いに答えなさい。

【Ⅰ】授業で読んだ文章

サハラ砂漠の奥にある岩の台地を歩きまわっていたときのこと。同行していたラルビーというアルジェリア人の〝自称〟技師が、足どりの重くなった私の顔をのぞきこんで「ファティゲ?」ときいた。長らくフランスの植民地だったアルジェリアでは、アラビア語が公用語だが、フランス語がそれに準じている。「ファティゲ?」とは「疲れたか?」という意味である。

たしかに疲れてはいたが、だらしがないと思われるのもシャクなので、カラ元気を出して「パ・ファティゲ(疲れてないよ)」と答えた。彼は安心したように先に立って進んで行ったが、いつもおくれがちな私が気になるとみえて、やたらに「ファティゲ?」を連発した。

オアシスにもどると、好奇心の強い彼は、日本語を教えてくれ、と言いだした。まわりにいるもの、あるものを片端から指さして、日本語で何というのだ? ときくのである。

ラクダ、ロバ、ニワトリ、アリ、ヤシ、スナ、ソラ、タイヨー……、私がゆっくり発音して教えてやると、彼はちびたエンピツで手帳に、それをひとつ、ひとつ、アラビア文字で丹念に書き込んでいく。そんな名詞のいくつかを覚えたところで、日本語が話せるようになるわけでもないのに、①ラルビーは熱心で、いつまでたってもやめようとはいわなかった。

「それじゃ、ファティゲというのは?」

「ファティゲか。日本語ではツカレタだよ」

「トゥカレタ? ふーん、トゥカレタか」

その翌日。彼は相変わらず私の先を歩いていたが、ときどき私が追いつくのを待って、「ナイ・トゥカレタ?」ときいた。私は思わず笑って「ナイ・ツカレタ」と答えた。フランス語の「パ(pas)」は、正確には「ヌ(ne)」と共に用いて否定をあらわすのだが、会話ではパですませることが多い。そのパは日本語でどう言うのかときかれ、私は「ない」だ、と教えたのである。否定は「ない」、肯定は「ある」だ、と。

ずいぶん、いい加減な教え方だが、彼はさっそく、それをフランス語の語順「パ・ファティゲ」に従って応用したわけである。しばらく歩くと、ラルビーはまたふりかえって、こんどは「アル・トゥカレタ?」ときいた。私は②意表をつかれ「ウイ、アル・ツカレタ」と答えて岩陰に腰を下ろした。そして、おなじ人間でありながら、どうして言葉の順序というものが、たがいにちがっているのだろうと、あらためて考えさせられた。

ものの名称が異なるというのは、べつに不思議なことではない。おなじ言葉を使う民族でも地域によって、ものの呼び名がちがうことは、ざらにある。

古歌にあるではないか。

草の名も所によりて変(かわ)るなり
難波(なにわ)の葦(あし)は伊勢(いせ)の浜荻(はまおぎ)

だが、語順(言葉の順序)や構造(文法)が異なるということは、名称のちがいをはるかに越えて、考え方の相違を、はっきりと示している。なぜなら、どんな民族も母国語の道筋に従って思考するからだ。英語にしても、フランス語にしても、否定詞は前にくる。A、その語順でラルビーは「ナイ・トゥカレタ?」ときいたのだ。それは彼の頭のなかで、何よりも、否定か肯定か、が、まっ先に問題になったことを意味している。それに対して日本人は、まず「疲れる」という事態が浮かび、ついで、その事態が肯定であるか、否定であるかを問う、ということになろう。はじめに状況ありき——これが日本人の考え方の出発点なのだ。

ところが、フランス語や英語、その他おなじような語順を持つ言葉を用いる人間は、最初に状況がどのようにあるか、を問いただす。この発想の道筋は、そのまま語順に従っているわけである。

(森本哲郎「日本人は言葉とどうつきあってきたか」による。)

【Ⅱ】池田さんのノート

○筆者がラルビーに教えた日本の言葉（名詞以外）

・「ファティゲ」は日本語では「ツカレタ」

・日本語では［B］

○筆者に教えられた二つのことを応用して、ラルビーが発した言葉

①否定を使った疑問文「ナイ・トゥカレタ？」

②肯定を使った疑問文「アル・トゥカレタ？」

○ラルビーが発した言葉と日本語の本来の語順のちがいについて、筆者が注目したこと

〈筆者が注目したこと〉

・語順や構造のちがいは言葉を使う人の考え方の相違を示しているということ

⇦

筆者の考察

・日本語の語順に従った発想の道筋　↓まず［C］を問う

＝

はじめに状況ありきが日本人の考え方の出発点

・フランス語や英語の語順に従った道筋　↓最初に状況がどのようにあるかを問いただす

(一) 【Ⅰ】に①ラルビーは熱心で、いつまでたってもやめようとはいわなかった とあるが、このような様子のラルビーの性格について、別の言い方で表した次の文の［　　］に入る最も適切な言葉を、【Ⅰ】の本文中から六字で抜き出して書きなさい。

ラルビーは、［　　］性格である。

(二) 【Ⅰ】に②意表をつかれ とあるが、ここではどのような状況を表しているか。最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア　思いがけないことを言われたということ。
イ　急に他の言い方をたずねられたということ。
ウ　いきなり弱点を見抜かれたということ。
エ　繰り返し同じことを問われたということ。

(三) 【Ⅰ】の［A］に入る言葉として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア　そのうえ　　イ　しかし
ウ　それでも　　エ　だから

(四) 【Ⅱ】の［B］に入る最も適切な言葉を、【Ⅰ】の本文中から十五字で抜き出して書きなさい。（句読点や「　」などの符号を含む。）

(五) 【Ⅱ】の［C］に入る適切な内容を、本文中の言葉を使って、三十字以上、三十五字以内で書きなさい。（句読点を含む。）
ただし、「事態」「肯定」「否定」という三つの言葉を用いること。

四

後のグラフA～Cは、全国の小中学生を対象に行った、地域や社会についての調査の、茨城県と全国の回答結果を表したものです。これらのグラフを見て、地域とのかかわりについて、あなたの考えを書きなさい。

ただし、以下の条件に従うこと。

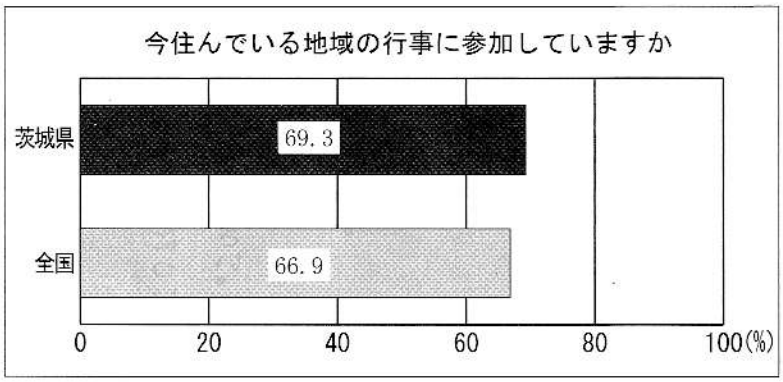
1　百字以上、百五十字以内で書くこと。（句読点を含む。）

2　二段落構成とし、第一段落には、グラフから読み取れることを書き、第二段落には、第一段落に書いたことをふまえ、今後、地域とどのようにかかわっていきたいか、自分の考えを書くこと。数字を使う場合は、99.9％のように書くこと。

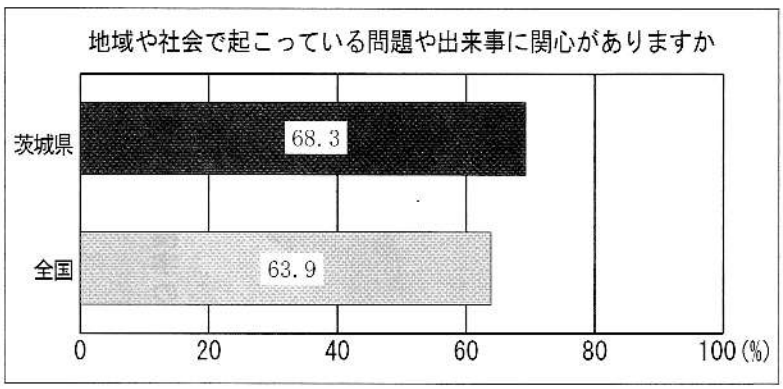
3　正しい原稿用紙の使い方をすること。ただし、題名と氏名は書かないこと。また、〈〈 や ═══ などの記号（符号）を用いた訂正もしないこと。

4　文体は、敬体「です・ます」で書くこと。

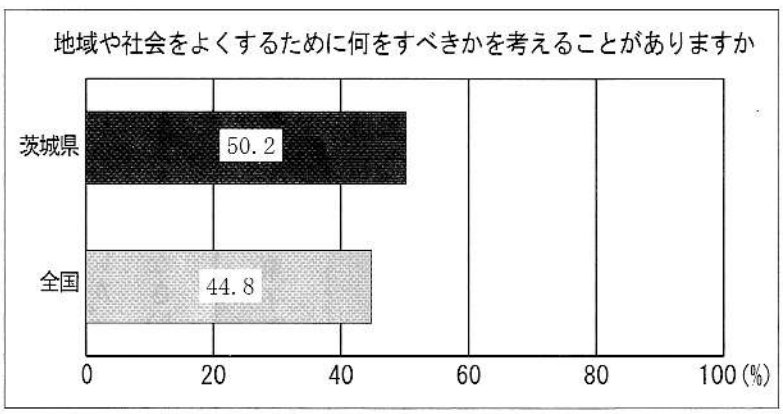
グラフA



グラフB



グラフC



注：グラフの数値は、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合を合わせたもの。

（「平成27年度　全国学力・学習状況調査」から作成）

五

次の(一)～(三)の問いに答えなさい。

(一) 次の(1)～(6)の――線部について、片仮名の部分を漢字で、漢字の部分の読みを平仮名で書きなさい。（漢字は楷書（かいしょ）で書くこと。）

(1) 成功のヒミツを探る。

(2) 火花が飛びチる。

(3) 自由にトウロンする。

(4) 箱の底に板を敷く。

(5) 新聞に広告を掲載する。

(6) 水の上を漂う落ち葉。

(二) 次の文の――線部を、敬語を使った表現にするためには、「食べる」をどのように直せばよいか。最も適切なものを、後の**ア**～**エ**の中から選んで、その記号を書きなさい。

校長先生がお菓子を食べる。

ア 尊敬語の「いただく」に直す。

イ 謙譲語の「いただく」に直す。

ウ 尊敬語の「召し上がる」に直す。

エ 謙譲語の「召し上がる」に直す。

(三) 次の文の――線部と同じ品詞のものを、後の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

テレビで紹介されたことによって、商品の人気がますます高まった。

ア 今日はゆっくり走ってみよう。

イ 短時間ですばやく処理する。

ウ 祖父はおだやかな性格だ。

エ あらゆる人々に意見を聞いた。